



教育学研究科
長崎大学 教職大学院

Graduate School of Education Master of Education (Professional) Program

NEWS LETTER No.19

ニ ュ ー ス レ タ ー 2022.1

教育実践研究フォーラム in 長崎大学 (2021年11月20日開催)



令和3年度のフォーラムは、新型コロナウイルスの流行に伴う新しい生活様式に対応し、オンラインと対面のハイブリッド形式での開催とした。テーマを「すべての子どもたちへの学びの保障と豊かな学びへの誘い」とし、午前と午後のプログラムに分けて実施した。午前の部では、大学院生が25件、附属学校教員が9件、大学教員が8件の実践研究を20分ずつ最大7ブースに分かれて発表し、各ブースでは発表に対して様々な観点からの質疑応答が展開されていた。各研究のさらなる深化・発展等につながることを期待したい。午後はテーマに基づき、学びの保障のための実践やふるさと教育などを通じた豊かな学びについて、まず北海道教育大学の宮前耕史氏から基調講演をいただき、その後教育行政担当者、附属学校教員、大学教員の5名のシンポジストによるパネルディスカッションを実施した。当日は対面で81名、オンラインで58名、計139名の参加があった。本会が今後の教育の振興の一助になれば幸いである。初のハイブリッド形式での開催にも関わらず、多くの方に参加・協力をいただいたことに衷心より謝意を表したい。

【プログラム】

- 1 テーマ: すべての子どもたちへの学びの保障と豊かな学びへの誘い
- 2 日程
 〈午前の部〉 10:00 ~ 12:20 実践研究発表 42件
 開会あいさつ 藤本 登 研究科長
 セッション1... 発表21件、7ブース×3件
 セッション2... 発表21件、7ブース×3件

〈午後の部〉 13:30 ~ 16:05 シンポジウム(基調講演・パネルディスカッション)
 (1)基調講演:北海道教育大学教育学部釧路校 准教授 宮前 耕史 氏
 講演題目:「地域をともにつくる学校の先生」になる
 —北海道教育大学釧路校の取り組みから—

- (2)パネルディスカッション
 コーディネーター 長崎大学大学院教育学研究科 教授 長谷川 哲朗 氏
 基調講演者 北海道教育大学教育学部釧路校 准教授 宮前 耕史 氏
 シンポジスト 長崎県教育庁義務教育課 課長補佐 作元 浩二 氏
 " 長崎大学教育学部附属小学校 教諭 松尾 勇哉 氏
 " 長崎大学教育学部附属中学校 教諭 入江 康介 氏
 " 長崎大学大学院教育学研究科 教授 内野 成美 氏
 閉会あいさつ 星野 由雅 副学部長

実践研究発表



教科授業実践コース 高以良 智也

今回、対面とオンラインのハイブリッド形式での開催で、それぞれの良さを生かした次世代の研究発表会になっていた。私は、小学校音楽科を専門にしているため小学校と音楽科教育に関する発表を中心に拝見した。附属小学校の先生方や大学院の先輩方の発表は、今の時代のニーズに合った興味深いものであり、もっと多くのことを学びたいという思いが強くなった。また、質疑応答の時間も活発な意見交換が行われ、さらに考えが深まっていくのを感じることができた。発表者、参加者双方にとって学びのある研究発表会になっていたと思う。今回得られた知見を、今後、自身の研究や現場で生かしていきたい。

教科授業実践コース 池ノ下 祐子

グローバル化による情報通信技術の進展や国際社会とともにあり、2030年に向けた生徒エージェンシーとして自分を自ら良い方向に導く主体性が重視される中で、学習者のコミュニケーション能力を育成し、学習内容と学習者の思考や学習スキルにも焦点をあてる授業展開にはどのようなものがあるかを学ぶことができた。そうした主体的・対話的で深い学びの先には、学習者自身の文化と他文化が交わり相互文化の意識が高まることを想定され、自らの研究テーマと関わっており、研究をより多角的に捉え進めていく貴重な機会となった。また、教員のエージェンシーに関する発表から、さらに広く共同エージェンシーについての視点をもつ必要性を感じた。

教科授業実践コース 戸田 凌太郎

フォーラムは自分の学びの方向を見直すきっかけになる。ストレートマスターや現職教員など、様々な立場の大学院生の研究を各ブースで自由に拝見できたため、計画的な学びの進め方を知ることができた。例えば、ある現職教員の方は各実習で研究を進めるための計画を綿密に練り、それぞれの実習で明確なねらいを定めていた。実践を聞くことで、自分の学びや研究をどのように進めていくかを見直すきっかけになった。また、発表者の研究内容を聞いて、自分の学びを整理することもできた。例えば、あるストレートマスターの院生は、「生徒の書く力の向上」をテーマにした研究発表を行っており、自分の授業での手立てに生かせる学びとなった。

学級経営・授業実践開発コース 百岳 仁美

院生の皆さんや附属学校園の先生方、大学の先生方の発表を拝見しながら、実践研究発表の難しさを感じた。フィールドに入り、目の前の子どもたちの様子から、課題を設定すること。課題を解決するための授業を構想すること。その授業の効果を検証する方法を考へること。授業を実践すること。実践後にその効果を分析し、省察すること。省察したものをまとめて他者に分かりやすく伝えること。本日の発表に至るまで様々な過程を経ることができた。来年度の実践研究発表に向けて見通しを立てることができた。一つ一つの実践を、研究テーマに沿って省察していくことを通じて、授業実践力や教科指導力の更なる向上を目指していきたい。

教科授業実践コース 中尾 祐圭子

セッション1では社会科と総合的な学習の時間について、セッション2では私の専門である理科についての発表に参加させていただいた。社会科の発表では私が今まで持っていなかった授業の視点があり、理科との関連を考えてみるきっかけとなった。理科の発表では、生徒に見通しを持たせること、逆に見通しを持ちにくく、見通しの結果を裏切る未知の課題を設定することの重要性について学ぶことができた。自分の教科の学びになるだけでなく、他教科の視点を持つことができ、このように他教科のことも知ることが総合的な学習の時間で必要となる教科横断的なカリキュラムの構築に繋がるのではないかと感じた。

子ども理解・特別支援教育実践コース 石田 大暉

実践研究発表では、興味のある「非認知能力」「ICT」「科学的探究的な学び」をキーワードとする発表に参加した。実践研究発表の魅力のひとつは、自己の興味や専門性に応じて学びの深化を図ることだと思ふ。また、質疑応答・協議の時間では「非認知能力、コンピテンシーなど長期的な追究が必要となる研究の可能性と限界性とは?」「科学的探究で重要な“仮説”の定義は?また生徒への説明はどのように?」など、研究者教員の鋭い質問を切り口に交わされる深い議論を、当事者意識を持って聴くことができた。それぞれの所属や立場から、多様な視点で教育的課題や研究を捉え、協議を通じて新たに多角的・多面的な考えを獲得できた。

シンポジウムの概要



本年度は、オンラインと対面のハイブリッド形式での基調講演・パネルディスカッションを実施した。基調講演では、北海道教育大学の宮前耕史准教授が「地域をともにつくる学校の先生になる」という題目で、ふるさと教育や大学での取り組みを紹介しながら、学校のあり方について述べた。

パネルディスカッションでは、長崎大学大学院教育学研究科、長谷川哲朗教授をコーディネーターとして、4名のシンポジストが、「すべての子どもたちへの学びの保障と豊かな学びへの誘い」をテーマに、それぞれの立場での現状やコロナ禍での具体的な取り組み、今後の課題や思いを述べた。

教育行政担当者の発表では、子どもの当事者意識を育む教育の実践紹介があった。附属学校教員の発表では、一人一台端末を活用した学びの保障や、暮らしと学習の良さは何か考えるという取り組みを通じた豊かな学びについての紹介があり、大学教員の発表では、コロナ禍で教師が子どもへ寄り添うことの大切さが示された。

その後、基調講演者とシンポジスト同士の意見交換と、参加者からの質疑に対する応答があった。「行政」「学校」「大学」という多方面から「学びの保障と豊かな学び」について話を聞き、新鮮で有意義な意見交換を行うことができた。

教科授業実践コース 松村 燎

「学びの保障」と「豊かな学び」をキーワードに掲げ、コロナ禍の中での実践や大切にしている等をそれぞれの立場から述べていただき、多くの学びが得られた。特に基調講演を受けて、「地域をともにつくる」という一歩踏み込んだ姿勢と、長崎の各地域の魅力や抱える課題についての関心が、自分の中では全然足りていなかったことを痛感した。これからの子どもたちが持続可能な地域・社会・未来の創り手として活躍していく中で、「将来も町に住み続けたい」という地域に対する愛着や誇りを、どのようにして育てていくかが重要であると学んだ。まずは自分が地域を知ることから始めて、「地域をともにつくる学校の先生」になりたいと強く感じた。

子ども理解・特別支援教育実践コース 野中 美雪

コロナ禍における行動制限に伴い、学校現場では試行錯誤しながら実践が進められている。学びの場の変化に依らず大切なことがある。「学び手が当事者意識をもつ」ということ。大人が子どもの学びを保障するのではなく、子どもが自分の力で自分の学びを保障するという考え方である。「授業は生徒が創る」という言葉でも表現されていた。そのための土台として、受け入れてもらったという体験、成長を認めてもらった実感の大切さも話題になっていた。大人自身が「当事者意識を持った学び手であり続けられるか」が問われている。学びを止めない大人の姿や大人の生き方が子どもの学びの土壌となるのだ。大人として、学び手として、身が引き締まった。

学級経営・授業実践開発コース 岡田 泰知

フォーラムテーマにある「学びの保障」と「豊かな学び」の2点から新たな視点を得ることができた。特に地域と学校の在り方について興味深い学びがあった。今まで「地域をともにつくる学校」や「地域の中にある学校」という言葉を使用してきたが、「地域をともにつくる学校」という地方創生の視点から学校を捉えたことがなかった。学校も地域の一部である。ならば学校も地域づくりに参画することは可能だ。学校が地域と関わり、地域は学校に入り込むことで、地域全体で子どもを育てていく。どのように地域と関わっていくのか、子どもたちと一緒に地域のためにできることは何かという視点をもち、教科の枠にとらわれない豊かな学びを創っていききたい。

管理職養成コース 田崎 宏明

『「地域をともにつくる学校の先生」になる』という演題で北海道教育大学准教授 宮前耕史氏の基調講演が行われた。「地域をともにつくる学校」から「地域をともにつくる学校」への変換が求められ、様々な実践がなされており、とても参考になった。パネルディスカッションでは、「学びの保障」や「豊かな学び」を視点にたくさんの取組が紹介された。「自立した学び」や「授業は生徒が創る」など、手法だけでなく考え方も共感することができた。様々な発表内容や会場からの意見を繋ぎ、まとめるコーディネーター力の高さやその重要性も自身の学びの一つとなった。

子ども理解・特別支援教育実践コース 脇田 ゆりあ

「地域をともにつくる学校」という言葉が印象に残っている。「地域をともにつくる学校」ではなく、「地域をともにつくる学校」への視点を保持する必要があると感じた。学校の中には教育資源としての地域に興味はあるが、地域や社会の課題に対しての興味は薄く、当事者意識が低い学校も多いことを知った。現在「ふるさと教育」や「地域学習」が推進されているが、子どもも教師も当事者としてその学習に向き合うことができているか、今一度問い直す必要があると感じた。子どもたちが当事者意識をもって地域の課題に取り組み姿勢を育むために、まずは私自身が地域の一人として、地域の課題に興味を持ち、深く知ることから始めていきたいと思う。

管理職養成コース 楠富 香織

パネルディスカッションでは「子どもの育ちや学びは、大人が土台で大人社会が土壌である」という言葉が印象に残った。学校は、すべての子どもの学びを保障し、すべての子どもを豊かな学びへ誘う責務があり、それは、新型コロナウイルス感染症拡大の渦中にあっても変わることはない。子どもの学びを土台となって支え、豊かな土壌となって大きく育てるために、わたしたち大人が学び続け、成長し続けなければならない。すべての子どもたちが明るい未来を描くことができるよう、チーム学校で支えていきたい。そんな新たな決意を胸に、充実した時間をみんなで共有することができた。